

「二」次の文章を読んで後の問に答えなさい。なお、一部本文の省略があります。

問三

多田新蔵の捕らわれの姿は、どう見ても余りかっこうのいいものではなかった。^{〔注一〕}六尺近いみごとな体は、いたるところにこぶをつけたように筋肉が盛り上がっていたが、なんと言っても、赤いふんどし一本の裸姿である。

両手は体ごとあらなわでぐるぐる巻きにしばられていたが、右手の第二関節から手首へかけてだけが自由にされていた。新蔵はそのわずかに自由を許された手で、肩に担いだ拔身の大刀の柄をにぎっていた。要するに彼は赤ふんどし一本の姿で、大きな拔身の刀を肩に担いで、引き立てられて行ったのである。

彼が連れられて行く原野の風はまだ生ぐさかった。いたるところに討死した武田方の将士の死体が横たわっていて、そこに弱い夏の夕陽が斜に落ちていた。

問四

問五

べらぼうな話だ！ こんな合戦ってあるか！

新蔵は一日中彼の心を去来した思いを、いまま胸にいだいていた。敗戦の悲しみもなかったし、捕らわれの恥も恐怖もなかった。あるものは、奇妙な戦うが行われ、奇妙な結果になり、みんな死んだ中に、自分一人が生き残っているという変てこな感がいだけであった。

彼が歩いて行く原野に横たわっている武士たちの死体は、今まで彼が見て来たいかなるものともちがっていた。斬って斬って、斬りまくった果てに、力つきて斬死したといった納得の行く姿ではなかった。みんな不得要領のうちに、相果てたといった奇妙な死様をしていた。どれもこれも、みんな銃弾に射抜かれている。中には刀さえ抜いていないやつがある。死顔はみんなみにくかった。

べらぼうな話だ！ こんな合戦ってあるか！

だから、多田新蔵は自分が奇妙なかつこうで捕りよになっても、いっこうに気にかからなかった。恥ずかしくもなければ、怖くもくやしくもなかった。

彼はふてくさったように、大きな体をずしんと横へいに運んで行きながら、時時周囲を見まわして、
「水！」

とどなった。

「ぜいたくを言やあがる！」

織田兵は取り合わなかった。

「捕りよのくせに神妙に歩け！」
問A

「ばからしくて、神妙に歩けるか！」

新蔵は、時時、周囲の織田兵たちがぎょっとする程大きな声で笑った。無性に腹の底からこみ上げて来る笑いだった。

「狂ったのか」

だれかが言うと、新蔵はその声の方へ顔をまわして、

「狂った？ ばか者めが！ ばからしくて狂えるか、一体、なんだ、この合戦は！」

新蔵は路上に横たわっている味方の武士たちの死体をふみこえたり、それにつまずいたりしながら歩いた。

しかし、今日の合戦で、武田の騎馬隊を食い止め、そこに銃火を集中し、文字通りしかばねの山を築いた織田、徳川連合軍の陣地の馬防柵の近くまで来ると、問六とつ然新蔵は大声を上げてわめくように泣き出した。彼のほこりにまみれた顔を、なみだがうす黒いしずくとなっていくすじも流れ落ちた。

死体は一步一步柵に近付くごとに多くなった。武田の武士ばかりだった。新蔵の胸に、合戦時に自分をいく度となくおそった無念だった思いが、火となってふき上げて来た。

新蔵自身、いく度、この柵にせまったことか！ 馬をおどらせた。柵は高かった。馬から降りて柵を抜こうと

した。新蔵ばかりでなく、武田の何千の将士が同じことをした。すると天地をとどろかして銃火が、あたりにさくれつした。何回も何回も同じことをくり返して、武田の騎馬隊は、そのほとんどが全くこの馬防柵のところについてたのである。

柵の前まで来た時、新蔵はついに動かなくなった。大地にしゃがみこんだ。問七裸の捕りよは、織田の武士たちに手取り足取り担がれて、三重に張りめぐらされてある柵の設けられてある地帯をこえた。

(中略)

おびたらしい篝火のたかれている地帯のまん中を、新蔵は五人の武士たちにまもられて引き立てられて行った。原野の何十という酒宴場では、武士たちがよっぱらってさわいでいた。折れた槍の柄が飛んで来たり、大きな酒盃が肩をかすめたりした。と言っても、それらは必ずしも新蔵をめがけて投げられたものではなかった。大殺りくの行われた日の夜の興奮が、酒のよいであり立てられ、彼らを狂人^{きやうじん}にしているのであった。

新蔵が小半刻歩かされて連れて行かれたのは、極楽寺山のふもとの信長の本営であった。問八ここでも、あかあかと篝火はたかれ、酒宴は開かれていた。

そこは寺の境内のようなどころであった。注五丁度棧敷のように一段と高く造られた板敷の席には、何十人かの武将たちがずらりと居並んで、たがいに酒盃を交わしていた。

新蔵は庭先に引きすえられた。一人の中年の武士が庭へ降りて来ると、篝火を新蔵の近くに移すように命じた。注六やがて新蔵の裸身はほのおの光で赤く光った。顔も体もさながら赤不動のように見えた。

こんどは別の一人の、身分のありそうな若い武士が降りて来た。

「多田淡路守のせがれと言ったのは本当か」

「うそを言って何とする？」

「上様はご存じだぞ」

「上様とはだれだ」

「言葉をつつしめ」

槍の石づきで背中をひとつ小づかれた。この時、新蔵は初めて自分が信長の面前に引き出されていることを知った。が、棧敷の上のどこに信長が居るかわからなかった。大勢の武将の居ることだけはわかったが、新蔵の居るところからでは、一人一人の顔を判別することはできなかった。

若い武士はいったん去って行ったが、また現れた。

「捕らわれの身になっても、いっこうに恥じることはないという有難い御詫だぞ」〔注8〕

それには構わず、

「早く斬れ！」

と、新蔵はさげんだ。

「斬りたいのか？」

「早く斬れ！ 殺せ！」

「ばかなやつだな。恥じるにはおよばぬと上様はおっしゃっておられる」

「斬れ！」

「恥じるには——」

問九

武士が言いかけた時、初めて「恥」という言葉が、その持つ正当な意味をもって、新蔵の耳にはいつて来た。

「恥？」

「恥じるにはおよばぬと言うのだ」

「恥じる？ だれが恥じるか！ ばか！」

新蔵はどなった。実際に彼は自分が捕らわれたことを少しも恥じていなかった。恥じるようなまともな合戦ではなかった。

どこか一点正常でない狂ったところがあった。高阪昌澄さかまさずみも、内藤昌豊とうとよも、みんなあっけなく一しゅんにして相果てたのだ。信ずべからざることが起こったのだ。土屋昌次たちも、原昌胤たねも死んだ。馬場信春も死んだ。その他大勢の優れた武将たちがみんな銃火の中に息を引き取ったのだ。主君勝頼よりでさえどうなったかわかったものではない。

新蔵はばからしいといった気持ちしか持っていなかった。死んだ者がみなこっけいに見えた。昼間、彼は馬防柵のところで号泣したが、味方一万五千の将士の死を悲しんだのではない。

それとは少しちがっていた。柵をこえることのできなかった無念さが、ただ火のように胸をつき上げて来たのだ。柵さえこえることができたなら、おそらく武田勢は織田、徳川の連合軍を馬蹄〔注9〕の下にふみにじっていたことであらう。この合戦では討死しても恥でないと同様に、捕らわれようが、にげようが、いっこうに恥ではないのだ。

「俺がなぜ裸になったか、貴様は知っているか」

新蔵はどなった。逆に彼は若い武士に質問したのだ。

「そんなことを知るか」

「わからんだろう、お前には」

新蔵は大きな裸身をふるわすようにして笑った。そして、ぷつぷつと笑いをとめると、

「ばからしいのだ。こんな合戦は裸でたくさんなのだ。裸で、赤ふんどし一本でたくさんなのだ」

実際に、よろいを着たり、馬に乗ったり、槍を持ったりしたことが、今思えばこっけいに思える。裸でよかつ

問十

たのだ、裸で！

その時、ぷつぷりとなわは切られた。新蔵はふいに体の自由を得て、前にのめった。

「生命はたすけてやる。^{〔注10〕}仕官しろ」

武士は言った。

「仕官!？」

「上様の有難いお情けを終生忘れるな」

新蔵は地面に前のめりになったままの姿勢でいた。体を起こさなかった。仕官をすすめられようとは、全く思いも寄らなかったからである。

「返事をしろ。――異存はあるまいな」

また若い武士は言った。

新蔵は槍の柄が横から自分の胸に当たったのを感じた。それに支えられるようにして体を起こした。

どうして生命をたすけて、仕官をすすめるのであるか。信長が父多田淡路守を知っているためであるか。あるいは自分が赤ふんどし一本の異様な姿でいるためか、それが勝利者の気まぐれな心をしげきしたのか。

新蔵がなおも返事をしないでいると、若い武士は、

「考えておけ。仕官すればよし、そうでなければ首をはねる。とくと考えておけ」

それから彼は、

「すみへ座らせておけ」

と、他の者に命じた。すぐ暗くなっている樹蔭^{いん}から、二、三人の武士が現れると、新蔵の両手を取った。

新蔵はそこから三間程^{〔注11〕}はなれた雑木のしげみのそばに移された。そこに移されると、急に蚊^かの群れが新蔵

の裸身をおそって来た。これはたまらないと思った。

今の場合、新蔵には仕官の問題より蚊のしゅう撃^{げき}の方が気にかかった。仕官の方はさして重要な問題ではなかった。仕官を断って首をはねられても、それはもとと予定していたことである。捕まった時、すでにそうした運命が自分にやって来ることを覚^しごしていた。だれも彼もみんな相果てたのだから、自分一人が助かっても仕方のないことであつた。

しかし、仕官しろというのなら、仕官してもいいと思う。捕りよになったことに恥を感じなかったように、敵方へ仕えることも、今の場合、そこにたいした意味があるとは思われない。こんどの合戦では、何か重大なものが一本抜けているのだ。今まで通用していたものが、全部通用しなくなっている感じである。

新蔵はうでをやたらに左右にふりまわしていた。^{問十一}そして、首をはねられようと、仕官しようと、どちらでも構わ^くないが、どちらかに早く決めてもらわなければならぬと思った。こうして蚊にせめ立てられていてはやり切れない。

ひどくばからしい合戦にふさわしく、その結末も新蔵にはばからしく、こっけいに思えた。

新蔵は暗やみの中で、大きな眼を光らせた。先刻まで自分が座っていた席に、おいぼれ武士が一人現れたかと思つと、何か二言三言言つて、丁ねいに頭を下げて立ち去つて行ったからである。

すると、こんどは別の武士が現れ、同じように、篝火に半顔を照らされながらそこに座り、また何か言つて、^{問十二}棧敷^{せき}の方にうやうやしく頭を下げて立ち去つて行った。

それから次から次へと、武士たちは現れた。若い武士も居れば、年取った武士も居た。堂堂たる武士も居れば、貧相なやつも居る。図体の大きいのも居れば、小さいのも居る。階級も雑多であつた。中には、手負うた武士も居た。

新蔵はやがて彼らが、今日の合戦で手ごたえを立えた武士たちであることを知った。彼らは所属している部隊からわざわざここに出向いて来て、何かひと言かふた言、ここにいる武将たちから労をねぎらう言葉をもらい、それに感激して引きさがって行きつつあるのであった。

そうしているうちに、新蔵はおやと思った。

篝火の光の輪の中に、今までとはちがって、いやにおどおどした一見して下級武士と見える五人の武士が現れたからである。こんどの場合だけ、枚数から先刻新蔵をきつ問した若い武士が降りて来た。

五人の雑兵たちは、罪人のように、そこに一列に並んで座った。百しょうに武具を着けたような品のない連中だった。二人は若く、三人は中年だった。

「お前たちか、山県昌景を狙撃したのは」

若い武士は言った。その言葉ははっきりと新蔵の耳にはいつて来た。

「は」

五人の中では、一番まじに見えている二十二、三の若者が答えた。

「命令もないのに、なぜ狙撃した？」

「は」

若者は顔を上げた。

「以後、気を付けます」

「気を付けますでは相すまぬ。全軍の統制を破って、みだりに発砲ばうするとは何事だ。不届至極である」

それから、

「お前が他の者に命じたのだな？」

「は」

「なぜ、みだりにそのようなことをした？」

「は」

若者はすっかりおびえ上がって、口もろくにきけならしく、長いこと口をもぐもぐさせていたが、

「ひ、ひまだったのでございます」

「ひま？」

「あの時、することがなかったのでございます。まことに申しわけございません」

若者は両手を大地についていたが、よほどおびえているらしく、体は大きくふるえていた。

「本来ならきびしくばっするところだが、この度だけは見のがしてやる」

若い武士は言った。

問十二

この時、新蔵はしかられている若者より、もっと大きく自分の体がふるえて来るのを感じていた。ほとんど自分で制ぎよできない程、手もあしもどう体もがくがくと大きくふるえて来た。

新蔵は戦線の左翼よぐで、山県昌景が飛弾にたおれた時を見ていた。それはぐう然彼の眼にはいつた修羅場しゅらばのシーンであったが、山県昌景の死の意味は武田軍にとっては、限りなく大きいものであった。合戦の神と言われ、長く武田の至宝と言われた山県昌景の死は、急に武田軍の運命を暗く冷たいものにしたのである。新蔵はその時山県昌景さえたおれてしまったのだからもうこの合戦はだめだと思った。

しかし、それにしても、山県昌景の死は、信じられぬ程あつけないものであった。彼はくずれ立った味方の軍勢に下知するために、馬上に大きく身をうかせた。それはどこから見ても、山県昌景以外の何人とも見えぬ堂堂たる姿であった。

が、次のしゅん間、彼はいきなり前かがみになったと思うと、たわいなく馬上から転がり落ちたのであった。信じられぬようなあっけない落馬の仕方であった。乱戦の最中だったので、この出来事はたちまちにして戦場の混乱のうずの中に巻きこまれ、あと形もなくなってしまったのである。

ひまだったから狙撃したと言うのか。ひまだったから！ 新蔵は自分でも知らぬ間に立ち上がっていた。

新蔵は改めて、そこに居並んでいる五人の雑兵の姿を見つめた。言うまでもなく今日の合戦で、織田方の鉄砲隊に属した武士たちであろうが、武士になってから、そう長い歳月を送っているものとは見えない。あるいは刀一つ使えないかも知れない。

この雑兵たちは、手持ちぶさたをまぎらわすために、彼らの眼にも目立って見えた一人の武田の武將に照準したのである。ばからしいことは百も承知していたが、そのばからしいことの限りが、この時、彼にこの日初めての忿怒を点火した。

新蔵はとつ然、大きいなり声を上げると一しよに、彼らの方へ、篝火の光の輪の中へ身をおどらせた。とっ進した。若い武士はさっと身を背後に退いた。が、その時新蔵の手は、武士の持っている槍にのびていた。

新蔵は槍をうばった次のしゅん間、槍をかかえ直すとみるや、いきなり、立ち上がりかけた若い一人の雑兵のわき腹をつきさしていた。そしてつきさしたまま、二、三間走って行って、立木の根本におし付けるようにして、相手の体から槍を抜いた。

新蔵は叫声と怒声が周囲にわき起こっているのを聞いていた。棧敷から何人かの武士たちがかけ降りた。篝火の光の中を、二、三人の武士たちが入り乱れて横切った。

まっ先にせまって来たのは、槍をうばわれた若い武士だった。ふりかぶった刀の半分が篝火の光の中でひらめいたが、あとはやみの中に消えた。

新蔵は雑木の間をくぐってのがれた。気が付いた時、彼は竹やぶに沿った道路を走っていた。何人かの足音がすぐあとにせまっていた。

「来い！」

新蔵は立ちどまると、槍を小わきにかかえたまま、やみの底をうかがうように、身をおりながら向きを変えた。一人をついた。太ももらしかった。

また一人をつきさした。十分の手応えを感じている時、新蔵は裸の肩先を横から斬り下げられた。はげしい痛みが全身を走った。刀が欲しかった。槍をすてて、刀が欲しかった。

新蔵は重傷を負いながらまた走った。が、何程も走らぬうちに、彼は再び立ちどまると、槍をつえにして立ち、おそらく自分にとって最後であるにちがいない決とうの相手がせまって来るのを待った。

そこは坂の中途らしかった。はるか下の方で、いくつかのたいまつが動いている。叫声と喚声^{かん}が、次第に高くなって聞こえて来る。

多田新蔵にとって、ひどくばからしい、ほとんど信じられぬくらいの間の抜けた大会戦の一日は、いま終わろうとしていた。この日初めての、合戦場にあるじゅう実感がこの時新蔵のひん死の五体をみたしていた。が、それも長くは続かなかった。多田新蔵は新しい決とうの相手が現れるのを待たないで、ひざを折って、地面にたおれた。

〈注1〉長さの単位。一尺は約三十センチメートル

〈注2〉夜、あたりを明るくするために燃やす火

〈注3〉時間の長さ。三十分

(井上靖「篝火」)

〈注4〉軍の大將が陣を構える場所

〈注5〉一段高いところに板をしいて、見物客を座らせるようにしたところ

〈注6〉赤色の不動明王。いきどおりの形相で、右手に剣、左手になわを持ち、背に火炎をおう

〈注7〉むすこ

〈注8〉貴人や目上の人などが下したことばや命令

〈注9〉馬のひづめ

〈注10〉武士が主君の家来として仕えること

〈注11〉長さの単位。一間は約一・八メートル

〈注12〉敵味方入りみだれてのはげしい戦いの場

〈注13〉マツなどの木をたばねて、火をつけて明かりとしたもの

問一 ―― 部A・B・Cの意味として正しいものを選びなさい。

A 神妙に

1 おとなしく、すなおに 2 きびきびと、すばやく

3 感情を表に出さないで 4 みじめで情けなく

B うやうやしく

1 おおげさに 2 よそよそしげに

3 おもねって 4 へりくだって

C みだりに

1 うっかり不注意に 2 考えもなくむやみに

3 くわだててひそかに 4 予告なくつつ然に

問二 「多田新蔵」はこの合戦で何軍に属していますか。また、敵は何軍ですか。

問三 ―― 部「多田新蔵の捕らわれの姿は、どう見ても余りかっこうのいいものではなかった」とありますが、どのような姿が「余りかっこうのいいものではなかった」のですか。十五字以内で書きなさい。

問四 ―― 部「弱い夏の夕陽が斜に落ちていた」はこの文章の中でどのような効果をあげていますか。

1 太陽のように光りかがやくかつての武田軍の栄華が読者に明示する効果

2 武田軍があえなく敗戦に終わってしまったことを読者に印象づける効果

3 武田軍にわずかな勝機がまだ残されていることを読者にほめかす効果

4 最後まで立派に戦い抜いた武田軍の兵士たちの美しさを読者にうったえる効果

問五 ―― 部「こんな合戦であるか！」とありますが、この合戦で敵軍はどのような作戦で圧勝したのですか。文章中の言葉を用いて三十字以内で具体的に説明しなさい。

問六 ―― 部「とつ然新蔵は大声を上げてわめくように泣き出した」のはなぜですか。文章中の言葉を用いて簡潔に答えなさい。

問七

——部「裸の捕りょは、織田の武士たちに手取り足取り担がれて、三重に張りめぐらされてある柵の設けられてある地帯をこえた」とありますが、ここでの「裸の捕りょ」という言い方はどのようなことを表していますか。

- 1 新蔵が捕らわれの身であることを強調することで、敵方に自由をうばわれた新蔵が悲しみにうちひしがれていることを表している
- 2 新蔵と呼ぶないことで、とつ然笑ったり泣いたりする不可解な態度の新蔵を敵方がもうまともに相手にしていないことを表している
- 3 着物も着ないで平気でいる新蔵のさまを言うことで、新蔵のあららしいふるまいを敵方がもてあましあきれていることを表している
- 4 新蔵という名前を出さないことによって、ぬけがらようになってしまった新蔵を敵方が物のようになってあつかっていることを表している

問八

——部「やがて新蔵の裸身はほのおの光で赤く光った」という一文は、どのような様子を表していますか。

- 1 先程まで激しい合戦の中にいた新蔵がまだ興奮しており、すぐにでも戦いを再開しようとしている様子
- 2 いつ殺されてもおかしくない状況に置かれてしまった新蔵が、周囲の者を警戒いして身構えている様子
- 3 新蔵が敵の前であっても少しもひるまず、かえって大きなかりを内に秘めていることがわかる様子
- 4 捕りょとして無様な姿をさらすことを新蔵が強く恥じていることが、だれの目にも明らかである様子

問九

——部「武士が言いかけた時、初めて『恥』という言葉が、その持つ正当な意味をもって、新蔵の耳にはいつて来た」という一文からはどのようなことがわかりますか。

- 1 それまで新蔵は裸であることのみを恥だと考えていたので、捕りょになることが恥だと聞かされておどろきをかくせないでいること
- 2 捕りょとなることが恥であるという戦の常識を忘れさせるほど、新蔵にとって今回の合戦が異常なものであったということ
- 3 捕らえられたら潔く死ぬしかないと考えてただ殺せとわめき続けていたため、新蔵には武士の言葉が全く聞こえていなかったこと
- 4 武士の言葉をたんなる気休めとしか思っていなかった新蔵が、敵の大將が本当に恥ではないと言っているのを知って感激していること

問十

——部「裸でよかったのだ、裸で！」と「新蔵」が考えるのはなぜですか。

- 1 これまでつかってきた戦の技術や経験などが何の意味も持たないような合戦には、きちんと武具をつけて臨む価値を見いだせなかったから
- 2 いても簡単に敵に敗北して捕りょになってしまう弱い自分は、立派な武具がふさわしいような勇かなな武士ではないと感じられたから
- 3 ごうかな武具で敵をひるませる従来の戦法が通用しなかったので、武具の威力に頼らず初心に返って武士としてのうでをみがくべきだとさとしたから
- 4 強い武將たちをも一しゅんのうちに殺してしまうような敵に必死にあらがうよりも、武具を捨ててさぎよく降参の意を示すのがよいと気付いたから

問十一

——部「そして、首をはねられようと、仕官しようと、どちらでも構わないが、どちらかに早く決めてもらわなければならぬと思った。こうして蚊にせめ立てられていてはやり切れない」とありますが、このときの「新蔵」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

1 命を失うことも武士としてのほこりを失うこともどちらも自分にとってはおそろしいことであり、苦しい選択をせまられていたたまれなくなっている

2 味方でたった一人生き残ってしまった自分の今後を決する重要な局面で、蚊のようなちっぽけな存在にふり回されてはいられないと気がせいっている

3 目の前の蚊のようなささいなことがらが気になり、武士としての生きざまや自分の命の行く末という重大事が二の次になるほどなげやりになっている

4 命を失うのか生き延びられるのかという生死のかかった極限状態にあるが、たとえどのような結末になろうとも静かに受け止めようと覚悟を決めている

問十二

——部「この時、新蔵はしかられている若者より、もっと大きく自分の体がふるえて来るのを感じていた。ほとんど自分で制ぎよできない程、手もあしもどう体もがくぐと大きくふるえて来た」のはなぜですか。

1 合戦の神とまで呼ばれた山県昌景が、見るからに戦に関して素人同然の下級武士にあまりにもくだらない動機で殺されたことに、強いいきどおりを覚えたから

2 堂堂たる山県昌景を討ち取った者たちがただの雑兵であることにおどろき、雑兵でさえ相当の力量を持つような敵軍に捕らえられていることが急におそろしくなったから

3 自軍の宝と言われた山県昌景が一見して技術も実力もない者たちに簡単に殺されたことで、新たな武器

の力にしょうげきを受け、自軍再興の望みはないことに絶望したから

4 大きな存在であった山県昌景が自分よりうで前も身分もおとる者たちに討たれて、山県を守れなかった自分のふがいなさを痛感し、くやしさがおさえられなかったから

問十三

——部「刀が欲しかった。槍をすてて、刀が欲しかった」とありますが、「新蔵」にとって、「刀」とはどのようなものですか。

1 幼いころから常に手元にあった、思い入れの強いもの

2 槍よりも軽く、けがをしていても簡単にあつかえるもの

3 どの武器よりも殺傷能力が高く、戦では欠かせないもの

4 自分のうで前を示し、武士としてのほこりとなるもの

問十四

——部「この日初めての、合戦場にあるじゅう実感がこの時新蔵のひん死の五体をみたしていた」とありますが、このときの「新蔵」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

1 この日はずっと捕らわれの不自由な身の上だったので、ようやく自由の身になり解放感を味わっている
2 生きて捕りよになるのは恥だと考えていたので、やっといさぎよく死ぬ場を見つけれられて安どしている
3 敵と直接向かい合い、自分の力の限りをつくして戦うことができたことに満足し、喜びさえ感じている
4 たわいない理由で山県昌景を狙撃した兵たちを討ち取り、うらみを晴らして、達成感をかみしめている

「二」 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

問二

人間と人間の関係がモノを媒介として結ばれる関係と、目に見えないきずなによって結ばれるものの二つの関係からなりたっているというとき、私たちは現代人としての常識でその関係を理解しようとしています。しかし、古代、中世の人びとの関係を頭におきながらこの問題を考えようとすると、現在私たちがもっている「常識」をいったん捨てなければならぬのです。

つまり、古代、中世の人間と人間との関係のあり方は、現代人のそれとはたいへん異なっているのです、それを理解するためには、私たちの常識をいったんたな上げにする必要があるのです。

たとえば、私たちには時間が均質的でまた直線的に流れてゆくと考えるけい向がありますし、空間は三次元の均質的な場であると考えています。これは現代という特しゅな時代に生きている私たちの常識ですが、古代、中世の人びとは時間と空間をそのようにはとらえていなかったのです。では彼らは時間と空間をどのように考えていたのでしょうか。

問三

具体的な例をとってみましょう。

古代、中世の人びとは空間を均質的な場であると理解してはいませんでした。聖なる空間とそうでない空間があつて、前者はおそれをもって接しなければならぬ空間でした。そのような意識は日本人のばあいは今でも残っていて、床の間に上がってはならないということはだれでも知っているでしょう。床の間は日本の家では聖なる場所なのです。

古代、中世の社会では、たとえば神殿は聖なる場所でしたから、そこにはいった者にもその聖性が移ると考えられていたのです。人殺しをしたり、どろぼうをしたりして追いかけられている人が神殿の中ににげこんだばあい、追っ手は神殿をとり巻いて、犯人が出てくるのを待つのです。神殿にはいつて捕らえることはできません。

なぜできないのでしょうか。それは神殿が聖なる領域で、いったんそこにはいった者は聖性を帯びますから、その者を捕らえることはできないと考えられていたからです。その聖性は、神殿のなかにいる間だけそこに留まる者に移っているのです、いったん神殿を出ると聖性を失い、すぐに捕らえることができます。神殿内には水も食料もありませんから、囲んで待っていれば、飢えとかわきのために犯人はいずれは出てこざるをえないのです。

しかしアテネのキロニーデンの神殿では、聖なる像にひもを結んで、そのひものはしをもって神殿から出ていく間は、犯人を捕らえることはできないことになっています。ひもを通して聖なるモノが神殿の外にいる犯人にも伝わっていると考えられたためでしょう。

問四

このような空間をアジール（聖域、避難所）といいます。現在では大使館や赤十字の建物に、かろうじてのこっているくらいですが、古代、中世の社会では個人の家も聖なる場所に近い性質をもっていましたから、いたるところにアジールがあつたことになります。

子どもの遊びのひとつおにごっこに、円をえがいたなかにいる子どもを捕らえることはできないというルールがあります、それも古代、中世のおとなのアジールのルールが現在まで子どもの遊びのなかにのこっているとみることができます。

アジールにはいろいろな形態があつて、渡し舟もアジールでした。追いかけられている人が渡し場に追っ手より先につき、舟にのったとき、あとから追っ手が近づいたばあい、船頭は追いかけられている人を船首にのせ、追っ手を船尾にのせて、対岸につくと船首の客をまずおろし、そののち舟を一回転させて船尾を陸につけて追っ手をおろすことになっているところもあります。

あるいは、追いかけられている人が農具のひとつである馬ぐわの下でパンを一片食べている間は、追っ手は近

づいてはならないというルールもあります。私たちには子どもの遊びのようにみえるかもしれませんが、このアジールは、古代、中世の人びとの人間関係のなかでは、とても重要な役割をはたしていたのです。

「我が家は城なり」という法諺（注）ほうげんもアジールとしての家を示しているのです。たとえ殺人犯であっても家にのがれ、その家の主人が犯人をかくまっているばあい、警察などの公権力といえども家におし入ることはできないとされていたのです。現在の私たちには理解しにくいこのアジールを説明するためには、中世人の空間、つまり世界についての考え方の輪かくを示しておく必要があるでしょう。

現代に生きている私たちは、世界はひとつだと考えています。たしかに飛行機にのりさえすれば、たいいていのところへは十数時間で行けます。どこへ行っても今私たちが使っている時計で時間を計り、円をその国の通貨にかえさえすれば生活できるのです。世界中の人びとの生活の様式がたいへん似てきていますから、あまり抵抗なく外国で暮らせるのです。

このような世界に生きている私たちには、現代の世界の常識を過去にもちこもうとするけい向があります。ところが古代や中世の人びとは、私たちの世界とはひじょうに異なった世界に生きていたのです。

（阿部謹也『自分のなかに歴史をよむ』）

〈注〉法律についてのことわざ

問一 この文章の展開のしかたの説明としてふさわしいものを選びなさい。

- 1 はじめに一ぱん的な意見を示し、それを否定したうえで独自の意見を主張する
- 2 はじめに具体的なことがらを一つあげ、それを根拠として結論を導き出してゆく
- 3 はじめに主張を述べ、それについての具体例をいくつかあげて、最後に主張を確認する

4 はじめに二つの対照的な意見を並べ、それらを対比させつつ一つの結論にまとめてゆく

問二 部「人間と人間の関係がモノを媒介として結ばれる関係と、目に見えないきずなによって結ばれるものとの二つの関係からなりたっている」とありますが、次の各文を「モノを媒介として結ばれる」関係と「目に見えないきずなによって結ばれる」関係とに分けた場合、どちらかが一つだけになります。それを選びなさい。

- 1 XさんはYさんが営む食堂の常連客である
- 2 XさんとYさんはともに東海道線で通学している
- 3 XさんはYさんの仕立てたスーツを着ている
- 4 XさんとYさんは愛し合って結こんした夫婦である

問三 部「では彼らは時間と空間をどのように考えていたのでしょうか」とありますが、古代、中世の人びとは「空間」をどのように考えていましたか。それがわかる四十字以上四十五字以内の一文をぬき出し、最初の五字を書きなさい。

問四 部「このような空間をアジール（聖域、避難所）といいます」について答えなさい。

① 「アジール（聖域、避難所）」とはどのような場所ですか。四十字以内で書きなさい。

② 古代、中世の社会におけるアジールの例を本文中から四つぬき出さない。

問五 部「現代に生きている私たちは、外国で暮らせるのです」とありますが、ここに示されている現代人の考え方はどのようなものですか。この文章全体の内容をふまえ、本文中の言葉を用いて四十字以内で書きなさい。

問六 あなたが変えたいと思っている現代の常識を一つ挙げ、その常識を捨てたときにどのような変化が起こると思うか、あなたの考えを二百字以内で書きなさい。

〔三〕 次の各文から、主語と述語の関係になっている部分をぬき出し、主語、述語の順で記号を書きなさい。

1 その^ア本は^イ私も^ウ以前に^エ読みました。^オ

2 富士山の^アよく^イ見える^ウ部屋を^エ予約した。^オ

〔四〕 次の――部1～5のカタカナの部分を漢字で書きなさい。また――部6～8の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

敵にホウフクする

健康をタモつ

花をソナえる

大臣がジシヨクする

カンパがとう来する

分別のつく大人

枝葉末節

類まれな才能

(問題は以上です。)

*問題文に使用した作品における難しい漢字表記は、現在一ぱんに使われている漢字またはひらがなに改めるか、読みがなをほどこすかしてあります。また、送りがなを加えたり取ったりしたものもあります。

ここは余白です。

[illegible][illegible]

四		三	
5	1	1	
	する	主語	
6	2	述語	
	つ		
7	3	2	
	える	主語	
8	4	述語	
まねな	する		